

そして、ある日とうとうこの家の人間に見つかってしまった。
暑い日だった。

家の裏庭にある涼しげな茂みの下にもぐり込んで体を休ませていた。
いくら毎晩ミルク浸しのパンを貰っているとはいえ量は少なく、いつも空腹だった。また野良犬ということで、いつでもおどおどして疲れきっていた。

茂みには淡い色の小さな花が群れて咲き、佳い香りがした。

少し、まどろんだらうか……。

突然、家の裏口が開き、人間が現れた。

「 あらあ…… 」

それは小柄な年配の女の人だった。

彼は慌てて逃げ出した。

以前にも他所の家で、そうして休んでいたら突然、水をかけられたことがあったからだ。棒で脅かされたことも一度や二度ではなかった。

油断したつもりはなかったが、此処は居心地が良いらしく、うっかり寝込んでしまったのだった。

とっさに庭を挟んで家の反対側にある、ガレージの裏手に駆け込んだ。
ところが、なんとそこにも人間がいた。

飛び上がらんばかりに驚いた。

しかも、そこにいたのは年配の男で背が高く、手には大きなスコップを持っている。

背の高いその男は、ガレージの裏の空き地に無花果の若木を植えているところだった。

気の動揺した若犬は、袋小路のようになっていいるガレージの裏手で逃げ場を失って右往左往し、近くにあったジョウロや植木鉢を蹴散らしながら一目散に走って、庭の端っこに積み上げられていた枯れ枝の蔭に駆け込んだ。

モップのようなボサボサした尻尾は、ますます低く引きずらんばかりだった。

ところが、植え込みをしていたその大男は、こちらを見ているだけで、脅かしたり追いかけてきたりはしない。

そればかりか、散らかった植木鉢や倒れたジョウロを元に戻しながら、静かにその場にしゃがみこむと、視線を低くして親しげに声をかけた。

「やあ、見慣れない仔だな……こんちは……」

「 どうしよう！見られてる！」

あっちにはおばさん、こっちにはおじさん……

「 ど、どうしよう……ふたりもいる……」

直感で、どうやら自分に大きな被害はないかもしれないという思いが、彼の頭をかすめたが、油断はできない。

若犬が隠れた処は、実は門からもっとも遠い庭の奥だった。

彼は、方角を見失って奥へ奥へと入り込んでしまったのである。

それでも庭の植込み沿いに隠れながらなんとか逃げようと思ったが、その目論見が外れた。門までは、どうやっても人間の前を通らなくてはならない。

もっと驚いたことには、いつの間にかその門が閉まっていたのである。

その時、大男がスコップを持って立ち上がった。

若犬は、大慌てで跳んで一步下がると、二人の人間のそのどちらからも離れた、庭の灌木の下に潜り込んだ。

もしも、その人間たちがスコップなどで脅かしに来たら、すぐに逃げられるよう、通路を確認した。

しかし大男は、犬には頓着せず植えた苗木の周りをスコップで土を被せたり、軽く地面をトントンとならしたりと、木の養生に余念がないようである。

「 ……イチかバチか、走り抜けて生垣を飛び越えようか …… 」

そう思っただけ息を潜めた。

ここからは人間の姿は見えない。しかし、きつといるにちがいない。

二人の人間と自分、それぞれに距離をとり、庭に静かな時間が流れた。

「 ……今ここを出たら、あのスコップを振り回して脅かしに来るだろう。あるいは水を掛けられるかもしれない …… どうしよう …… 逃げようか、隠れていようか …… 」

すくんだ若犬は尻尾を丸めて引つ込めたまま、どうしていいかわからず、目を泳がせるようにして藪越しに家のほうを振り返った。

すると、先ほどの茂みの辺りから、例の小柄なおばさんが手に何か器のようなものを持って現れるのが見えた。

一方、大男のほうを見ると、彼は彼女に自分の方を指し示し、

「そこに隠れてるよ …… 」
と言わんばかりに大きくジェスチャーをして見せている。

「 …… うわっ …… 居場所を教えちゃってる …… どうしよう …… 」

今ここを出たら、自分が危険なのは明らかである。しかも、彼女は手になにか持ってる。

「 ……ん？水、水かあ？ ……水を掛けるのかあ？ 」

若犬は身構えた。

ところが、その器を持ったおばさんは、こちらを見てはいるが、やって来る様子はない。

彼女は、近寄りもせず、遠くからこちらに声をかけてきた。

「おいで ……お前がいつも夜更けにゴミバケツをひっくり返していたのは知ってるよ ……毎晩パンを食べてたのも知ってるよ。猫が来ているものだとばかり思っていたよ ……あれじゃ少なかつたろう …… 今日はいきなり来ないけど ……これでもおあがり」

そう言っ、手に持っていた器をライラックの茂みの傍に置くと、家の方に戻っていった。

「 ……あれ ……いっちゃた …… 」

首をのばして彼女の動きを目で追った。

もう一度、今度はガレージのほうを見ると、スコップの大男はやはりしゃがんでこちらをみていたが、優しそうに微笑んで

「お、良かったなあ ……ごちそうだぞ ……行ってもらっておいで」
そう言うと、ひょいと立ち上がった。

背の高さがひととき大きく見え、若犬はビクツとして身構えた。

がしかし、犬が緊張しているのをよそに、彼はくるりと背をむけて、

ガレージの裏側へ行ってしまった。

「あれ……相手に背中を見せるとはどういうことなんだ？」

若犬は、その人間の無防備な行動を不思議に思った。

そして、自分の身に危険がないらしいことを感じ始めていた。

かといって、すぐにノコノコと広い処に出れば何が待っているか判つたものではない。

しばらく様子を見ることにした。

今更ながらに、物陰から首をのびし鼻先だけ出してじつと小花の咲く茂みの方を眺めた。時折、後ろの無花果の辺りも気を配りつつ……。

どれくらい時間がたっただろうか。

誰も現れない……

おそろおそろ家に近づく。

この数日、此処にいるので、だいぶ勝手の分かった裏庭である。

小花の香る茂みの辺りには誰もいない。

ミルクの入った器があるだけだった。木陰に置かれたその器には、なみなみとミルクが入っていた。

パンは入っていないが量はいつもの倍以上ある。

しかし若犬は、すぐには飲まずに用心深く辺りを見回した。

と、間もなく、器に鼻を突っ込むようにしてジャブジャブと音をたてて飲んだ。

「うまあ……」

ミルクは美味しかった。

誰もいない庭で、ミルクをたいらげた若犬は、ゆっくりとライラックの茂みに再びもぐりこんだ。

ようやく安堵感をおぼえた。

そして、ゆったりと大きいため息をつくとき、あらためてまどろみはじ
めた。

夏の風が吹きぬけた。

つづく

掲載した作品の著作権は全て作家月之宮成子に属します